

# 義塾とラテンアメリカ

## Bienvenidos a América Latina

— 魅惑のラテンアメリカへようこそ! —

江戸時代末期、蘭学塾として出発した慶應義塾は、鎖国を解いたばかりの日本にあってその当初から国際的な存在であった。それから150余年を経た現代。語学教育、地域研究、そして塾生・塾員（卒業生）による国際交流など、義塾と世界の接点は多岐にわたります。その接点のなかでも、今号ではラテンアメリカに注目し、義塾との関係を伝えます。

## 慶應義塾大学法学部・サンパウロ大学法学部交流史

法学部法律学科 教授

池田真朗

慶應義塾大学法学部は、サンパウロ

大学法学部と、我が国の大学の中で最も早く交流を開始している。その開始

時点には諸説あるが、「学術交流」の開始については1979年とし、正式

の交流協定締結は1981年とされている。交流の最初には、法律学科から

伊東乾、政治学科から十時巖周<sup>としまとしか</sup>という

法学部を代表する教授が関与し、ブラジル在住経験をもつ須藤次郎助教

（当時）の尽力もあった。その後今年まで、義塾法学部からは長年にわたり

交流代表を務めた森征一教授（現・名誉教授）をはじめ、3名の教員がサン

パウロ大学での在外研究や留学を経験し、また代表を引き継いだ筆者も、前

後5回にわたり現地でのシンポジウム

に参加している。1999年には三田で学術交流20周年記念行事とシンポジ

ウムを行い、サンパウロ側の交流責任者であるカズオ・ワタナベ教授（元・

サンパウロ州高等裁判所判事）に慶應

義塾から名誉博士号を授与した。さらに、2004年には義塾法学部からサンパウロ大学法学部に対して、学術

交流25周年記念講演会での感謝状交換（右端が筆者）

義塾からは森常任理事（当時）ほか7名が訪伯している。最近では、昨年4月に国際シンポジウム『日本・ブラジル消費者法の現状と展望』が、在日

ブラジル公使等、約70名の出席を得て三田で開催された。さらに今年の3月

交流25周年の感謝状を贈っている。サンパウロ側の功労者としては、全シンポジウムで報告者兼通訳として活躍し、義塾でもラテンアメリカ法の非常勤講師として教鞭をとった、二宮正人教授の名も挙げるべきであろう。

これまでの交流事業では、特に2008年の『ブラジル移民100周年・慶應義塾創立150周年記念日伯比較法シンポジウム』が大規模に開催され、



交流25周年記念講演会での感謝状交換（右端が筆者）

には、サンパウロで学術交流35周年を記念する『21世紀の法発展』が開催され、筆者や三木浩一教授、前田美千代准教授ら6名が訪伯したところである。

以上、本交流は、義塾法学部ことに法律学科の国際交流として質量ともに内外に誇れる実績といえる。サンパウロ大学は南米有数の大学であり、今後

も本交流は慶應義塾の国際化の潮流の中で重要な地位を占めるものとして、できれば大学全体の協定に拡張して、継続することが期待される。

## ブラジルの保健・医療を通して世界を学ぶ 医学部国際医学研究会

医学部 教授／公認学生団体 国際医学研究会 会長 武林 亨 たけばやし じょう

国際医学研究会（通称I M A）は、医学部にあった海外医事振興会、熱帯医学研究会という学生団体の流れを受け継ぎつつ、1978年に、当時の細田泰弘助教授を団長として大上正裕、清水宏、小宮山雅樹の3名の医学部生がブラジル、パラグアイで活動を行って以来、毎夏にブラジルを中心とした南米地域で1〜2カ月にわたる活動を行っている学生団体である。

初代会長であった寄生虫学の浅見敬三教授が、I M Aが南米地域で活動を行うことの意義を、「多くの熱帯病の罹患には医学的な因子の外に社会的な色々な因子が関与するが、医学的な解決は相当程度に行われていないとしても、社会的な解決には気の遠くなる程の年月を要するであろうと予想されている。感受性に富み、行動力の豊かな

若い医学生諸君が、これら人類の疾病の原型とも言えるべき素朴な病を自身自身の眼でたしかめて、その医学を体験するとともに、背景にある社会の実態を考える機会を持つことは、彼等の将来に大変な影響を与えるものだと思う。将来熱帯地方で医療にたずさわろう。人の出現を期待して言っているのではない。医学あるいは医療についての基本的な考え方の問題であるといいたい」と記しているように、新しい時代を見据え、若い医学生に海外の医学・医療に接する機会を設け、広く国際的視野を身につける場として活動を行ってきた。

サンパウロの大病院での病棟実習から、日本人移住地やアマゾン川流域での保健医療活動、そして国境を越えた南米諸国での活動まで、長年の多岐にわたる活動は、現地そして日本の多

くの方々からの多大なご支援なしには実現し得ない。サンパウロでは、学生たちの滞在に合わせて、毎年三田会の会合を開催して下さっている。こうした社会で活躍する諸先輩方と親しく接する機会を持てるという慶應義塾ならではの幅広い社会的経験も、学生たちの成長の源となっている。



セアラ州アラカチでの学童健康診断後にスタッフと

員1名が、第37次派遣団として、42日間のブラジルの活動を行う。医学・医療として社会の先導者たらんとする学生たちの活躍に期待したい。

自然が主役で、人間はオマケ？

価値観ががらりと変わる

ラテンアメリカの強烈な魅力



法学部 准教授  
ほんや ゆうこ  
本谷裕子

地域研究が盛んな義塾では、ラテンアメリカを対象とした授業ももちろん存在します。今回は法学部の「地域文化論Ⅰ—ラテンアメリカを旅する」と「地域文化論Ⅱ—疲れる、浸かれる、そして憑かれるスペイン語圏の魅力」を担当する本谷裕子准教授に話を聞きました。

ラテンアメリカ研究者の教員が  
自らの研究方法の手の内を明かす

今年度、日吉キャンパスで法学部の地域文化論Ⅰ、Ⅱを担当するのは、グアテマラの文化を研究する本谷裕子准教授です。法学部生のみならず、他学部からも多くの塾生が履修しています。「前期に開講した地域文化論Ⅰでは、「ラテンアメリカを旅する」と題し、欧米、アジアに比べ、その社会や人々のことがあまり知られていない当地の魅力を紹介してきました。ラテンアメリカには33の独立国の他に、宗主国・

領有国を持つ20余りの非独立地域もあります。公用語は主にスペイン語ですが、ブラジルはポルトガル語、英語やフランス語を主言語とする国もあります。また、この地域は先住民とヨーロッパからの移民が混ざり合っているため、文化も、社会も多種多様で、尽きせぬ魅力に満ちています」

後期の地域文化論Ⅱ「疲れる、浸かれる、そして憑かれるスペイン語圏の魅力」は、本谷准教授がオーガナイザーを務め、ラテンアメリカを専門とする塾内外の研究者をゲストに招くオムニバス形式の授業です。担当者はそれぞれの分野について、講義名の通りラテンアメリカの魅力を熱く、深く語ります。

「私の場合は、文化人類学的なアプローチから、グアテマラ高地に暮らすマヤ先住民女性の衣文化を研究しています。他の先生方も、政治や法律、宗



教などそれぞれの専門分野を持ち、独自の視点でラテンアメリカについて語ってくださいます。それぞれの先生が自らの興味の発端と研究方法の手の内を明かしてくださるので、履修者のみなさんには、「研究には多彩なアプローチがある」「ことを知ってもらえると思っています。担当者の誰もがラテンアメリカにとことん「憑かれて」「いますから（笑）、興味深い話が聞けることはまず間違いありません」

自然と人間の調和が  
幸福な人生観をもたらし

1984年に慶應義塾創立125年の記念事業の一環として地域研究セン

ターが創設され、義塾における地域研究は以前にも増して活発になりました。同センターは2003年、東アジア研究所に改組しましたが、引き続き他の地域の研究も盛んに行われています。

「懐の深い義塾の地域研究は、新参者のラテンアメリカ研究にも、充実した学習環境を整えてくれました。とくに法学部では、三田と日吉の教員が協同し、良好な連携を行っています。またスペイン語や地域文化論の授業に加え、3・4年次に人文科学研究会「スペイン語圏の社会と文化」で学び修了論文を提出すれば、副専攻の修了証を得ることができます」



グアテマラ・マヤ先住民女性と一緒に

塾生への教育の充実とともに、義塾が多くの特長を有するラテンアメリカ研究者を擁し、研究・教育に注力していることは、学会や他大学からも注目されています。

その一人である本谷准教授は、ラテンアメリカの魅力の源泉が、「大いなる自然と、素朴で幸福感に満ちた人々の調和」にあるといいます。

「20年ほど前まで、私を含め一般的な日本人が抱くラテンアメリカのイメ



『ラテンアメリカ 出会いのあつち』

(慶應義塾大学出版会 3500円税別)

ラテンアメリカに魅せられた義塾の14名の教員が語る、それぞれのラテンアメリカとの「出会い方」。

ージは、「政治的・経済的に不安定で危険な場所」というネガティブなものを見た。ところが、実際に訪れてみると、印象はがらりと変わります。統計で見れば貧しいと判断されがちなこの地域の人々はみな、とても楽しく幸せに生きています。彼らのこの幸福感はなぜ、と思ったのが、私がこの地に「憑かれた」理由です。調査で何度も通ううちに、強烈な太陽と雄大な自然に、人々が逆らうことなく調和していることがわかってきました。それは、自然が主役で、人間はオマケという感じですが、先住民の人々も、かつては為政者であったヨーロッパ系の人々も、双方の混血の人々も、大いなる自然のもとで、おおらかに、幸福感に満ちて暮らしています」

自然とともに生きるラテンアメリカの人々に学ぶことは、日本とも欧米とも異なる価値観、新しい視点を持つことにつながるのではないのでしょうか。

## 実感、ラテンアメリカ① フォルクロレを奏でる

公認学生団体 ラテンアメリカ音楽研究会 代表 経済学部2年 坂本七温君 さかもとなお

皆さんは「フォルクロレ」という音楽をご存じでしょうか。本来は民族音楽の総称として使われますが、日本においてはラテンアメリカのそれを指して呼ばれることが多いようです。私たちラテンアメリカ音楽研究会（通称「ラテ研」）は、ボリビアやペルーなどの高原地方に伝わる民族音楽を中心とする「フォルクロレ」を演奏し、我が慶應義塾大学にアンデスの風を吹かせんと、日々活動しています。

まず楽器の紹介をしましょう。演奏は主に5つの楽器で構成されます。ケーナという竹や葦でできた縦笛。葦の管が連なっているサンポーニャ。10本の弦からなり高音がよく響くチャランゴ。重低音の響くボンボという打楽器。

そして、皆さんにとってもなじみの深いクラシックギター。この5つです。いずれも欠かすことはできません。

ラテ研への入部の動機は人それぞれです。「演奏を聴いて感動したから」「ケーナの音にひかれたから」「ギターの経験を生かしたいから」「ギターの音が、いずれも根底の部分には「新しいことを始めたい」という気持ちがあると思います。ラテンアメリカの調子は日本人にとって必ずしも身近ではないですが、楽器未経験者でも気軽に始められ、楽しむことのできるフォルクロレはとても魅力的です。楽器、歌、踊りと全身で楽しむフォルクロレ、あなたもこの世界へ足を踏み入れてみませんか？



## 実感、ラテンアメリカ② チリと僕

仕事柄、時折南米のチリに行くことがある。チリは遠い。成田から国際線を乗り継いで丸一日、眼下に赤茶けた大地が見えてきたら首都サンチアゴ

だ。異様に細長い国土の大部分は乾燥地帯で、東側はアンデスの険しい山岳地帯である。富士山にそっくりな山もあるが、何と富士山よりも2000m

以上高い。乾燥した高地は絶好の天文観測適地として知られ、チリの山岳地帯には最先端の天文台が数多く設置されている。私はそこで銀河系の中心を

理工学部物理学科 准教授 岡朋治 おかともはる

魅了されていました。

ブラジルから帰国後の昨年3月、未  
来の日伯関係に貢献したいという思い  
のもと第一回日伯高校生未来サミット  
を浜松市で開催しました。10年後の日  
伯関係を担っていく在日ブラジル人と  
日本人の中学生・高校生が、今まで知  
らなかつたブラジルの姿を共有し、未  
来の日伯関係について議論をすべきだ



す。日系移  
民から一世  
紀が過ぎ、  
日伯関係が  
一層深みを  
増していく  
この転換期  
にこそ、日  
本に日系コ  
ミュニティ

という「ブラジル」があることを思い  
出し、彼らとの「共生」という一歩か  
ら日伯関係を再構築してはどうか、と  
私は思うのです。

こうした思いを胸に、今年の1月に  
は大阪市でのポルトガル語スピーチコ  
ンテストに出場しました。スピーチで  
は、在日ブラジル人との共生によって  
見えてくる新たな日伯関係について自  
分の思いを伝え、優勝することができ、  
今年の8月に大阪市親善大使として再  
び渡伯する予定です。私にできること  
は小さなことですが、少しでも日伯関  
係に貢献できればと願うばかりです。

### ”もう一つのブラジル”から未来の日伯関係を

実感、ラテンアメリカ③

「ブラジルに行きたい」。ただ漠然と  
そんな思いを抱いたことが私とブラジ  
ルの出会いでした。高校2年次には、  
留学生として1年間ブラジルで過ごす  
こととなり、あつという間にこの国に



観測する。一方で、天文観測に最適な  
環境は人間には全く優しくない。大部  
分の生物にとって、水と空気は生きる  
ために必須のも  
のだからだ。特  
に温暖湿潤な気  
候に育った我々  
は、1週間もす  
れば皮膚はカサ  
カサになり、呼

吸器系にダメージを抱えることになる。  
そのような過酷な地に住むチリ人は  
底抜けに明るい。どうやら、人生に対  
する考え方が我々とは根本的に異なる  
らしい。一般に時間は守らない、仕事  
も完璧とは言えない、だが皆楽しそう  
である。娯楽は、多くの南米人がそう  
であるように、サッカーである。一度、  
ホテルの従業員に誘われて対戦したこ  
とがあるが、酸欠で危うく死にそうに

なった。ちなみに標高は2400mだ  
った。もう南米人とはやりたくない。  
厄介な昆虫もいる。和名「ブラジル  
サシガメ」。「シャーガス病」という難  
病を媒介する。感染初期を逃すと、有  
効な治療法は無い。恐ろしいことに感  
染後、無症状期間が数年から十数年も  
続き、発症後は速やかに死に至るらし  
い。一応は気をつけていたのだが、大  
丈夫かな、僕？

法学部政治学科2年 久保山潤君 (くぼやまじゅん)